
報告者名	酒井 朋子	被調査者生年	①未確認(男)
調査者名	酒井 朋子	被調査者属性	①寒風沢区副区長
補助調査者	稲澤 努		

被調査者(主な聞き書きは話者①から)

*話者② 生年未確認(女)、民宿経営者

はじめに

2012年9月17日、塩竈市浦戸寒風沢地区にて神明神社秋季例大祭が行われた。本報告はこの例大祭の調査についてのものである。調査は調査者と補助調査者の2名で行った。

寒風沢地区では通常、春期と秋季の2回、神明社例大祭が行われる。2011年3月11日に起きた東日本大震災のため、2011年は春期・秋季の双方ともに中止となったが、2012年春期からは再開した。秋季の例大祭は今回が震災以降はじめてということになる。

寒風沢地区の住宅地は津波により甚大な被害を受けたが、丘の上にあった神明社そのものは津波被害を受けなかった。ただし、海際の倉に保管していた祭具一式が流れてしまい、御輿飾りもなくなったため、今後の祭りをどのような形で行うかが課題となっている。写真1は鳳凰などの飾りが流されてしまった御輿。神社の社務所に置かれている。

9月17日の秋季例大祭では、御輿渡御は行われなかった。午前11時から神明社拝殿で神事が行われたのち(写真2)、海岸そばの漁協センターで12時半から一部の神事と直会が行われた(写真3)。以下はその直会会場の聞き取りである。

話者①

2012年5月の総会より寒風沢区の副区長をつとめている人物。漁業従事者。

三社合同祭について

寒風沢の神社のお祭りは春期と秋季だが、そのほかに三社合同祭というものがある。これは龍神大権現、船入島弁財天、大根神社を一度に祀るものである。

大根神社というのは七ヶ浜と浦戸諸島間の沖合の海の中にあった。昔は海上の島だったらしい。この大根神社の分神が金華山にある。寒風沢の人びとは大根神社を海の守り神として祀ってきた。また、弁財天も船入島という場所にあったのだが、これらを移動してきて合祀した。平成2年前後のことである。

もともと龍神大権現も船入島にあったのだが、船でしか行けないこともあり、祀る人がしばらく途切れていた。すると5人ほど続けて寒風沢の家の大黒柱が次々に海に取られる、ということがあった。それでお祓いをしてもらうと、龍神大権現のためだということになった。それで三社を集めて祀ることにした。もともと弁財天と大根神社のお宮は神明神社の近くの鐘つき堂のそばにあったのだが、龍神大権現を移してきたときに、三社あわせて砲台近くに移転した。

三社を祀る日はそれぞれ違っていたので、中間をとって現在の6月の日付になった。その合祀のころからサラリーマンが増えてきていて、日曜日でない誰も来てくれなかったということもある。

はじめて三社合同祭をやったときには、その場にいた神職の修行をした人に弁財天が「おりてきた」。それで自分たちがこうして三社合同祭をやり始めてよかった、ということになり、飲めや歌えやの盛大な祭となった。

元屋敷という場所について

(この話題は区長をまじえての聞き取りとなる。)

現在住宅地となっている場所から島を反対側に行ったところに「元屋敷」という地名がある。これは今は水田になっている場所で人は住んでいない。だが房総半島からやってきた長南長南和泉守が開拓に入る以前から、昔は人が住んでいたらしく、それが地名に残っている。ただそれを確かめる証拠は多くない。寒風沢に伝わる昔話のひとつ、「古下駄のお化け」は、ものを大事にしなさいという教訓を語るものだが、これが元屋敷に人が住んでいた頃の話と伝えられている。

祭りと寒風沢の今後について

寒風沢の住宅地、とくに被害の大きかった南地区は津波危険区域になっており、現時点では、5メートル以上のかさ上げをしなくてはならないという方向性で話が動いている。その場合、流出しなかった家の人たちも同じようにかさあげしなくてはならないことになり、水回りや玄関の工事でかなりの経済的負担があるだろう。

新しく家を建てようにも、金融機関は60才をすぎた人間には簡単に金を貸してくれない。寒風沢の住民の多くが60才以上。そうすると息子や娘に頼ることになるが、子供はもう塩竈や仙台に出ていて、寒風沢に新しく家を建てるということを完全に納得しにくい。そういう難しさがある。

震災後、仮設住宅に住む人たちと、もとの家に住む人たちの間で、コミュニケーションが以前よりとりにくくなった。今回の祭りの直会では、久しぶりに多くの人が集まれてよかった。これからもやっていけるという気持ちになる。

話者②

夫と民宿を営んでいる60代の女性。

祭について

ふだん例大祭に使っている道具は、海際にある郷倉（ゴウソウ）に入っており、倉ごとそっくり流れてしまった。神輿飾りも全部そこに入っていたから一緒に流れてしまい、今日は神輿の出ない祭りとなっている。

今日はたくさんの方が集まれてよかった。お祭りのあとの直会は、普段は丘の上の神社の社務所で行う。今日はこの漁協センターでやるということで、たくさんの方が集まっている。

みんなこういう場所に集まると笑っているけれど、家に帰ると「これから一体どうしようか」と悩み、じつとつむいているような状態。

震災後の民宿経営について

震災後も営業している民宿は寒風沢では現在2つあり、自分のところはそのひとつ。夫婦で営業しているが、2人とも60才を超しているため、今後のことも考えてどうしようか迷った。だがこれまでのお客さんも応援してくれているし、引退するにはまだ早いかということで、営業を続けることに決めた。遠くから応援のために訪ねてきてくれる人を泊めるため、今は近所の家を借りて仮営業している。

いとこが奥（海から少し離れた場所）に住んでいるため、そちらに移転することも考えた。だがやはり海がすぐ近くに見える場所がいいということで、震災前と同じ場所で営業することにした。

家は流出しなかったが、水や泥がかなり流れ込んで傷んだ。津波の危険区域で新築が難しいので、建物はそのままに、高さだけ持ち上げることにした。かなりの費用がかかるため、老後のためにと貯めておいたお金を使い切るような恰好。台所、風呂といった水回りは作り直しになる。見積もりを一応出してもらってはいるのだが、実際には見積もりよりだいぶ高い費用がかかる。離島のため、1回で運ぶ計算で出した資材を2回に分けて運ばなければ

ならなかったり、予測が難しいというのものもあるようだ。

民宿では、だいたい自分の家でとったものを出していたが、震災以後、難しくなったものもある。海苔は機械が壊れてしまったので再開は簡単ではないかもしれない。海苔の収穫は11月から3月だが、準備に7、8か月かかるので、なんだかんだで一年中やるべき仕事があった。

米も自分の田んぼで作ったものを出していた。味噌も自家製。田んぼについては、もう一度やってみたいと思っている。



写真1 寒風沢神明社の御輿



写真2 例大祭当日の拝殿正面



写真3 漁協センターでの神事